

看護学生におけるツベルクリン反応検査の意義 —検査前後での結核の知識・健康行動の比較の観点から—

藤原 正恵、神徳 規子、森松 伸一
瀧井ヒロミ、松村三千子

1. 研究背景

近年、医療従事者、特に若い研修医、看護師および看護学生における結核の集団感染が問題となり、大半の病院や教育機関では、入職や入学時にツベルクリン反応検査が実施されている。この検査法が結核感染の早期発見・早期治療に有効であるとの報告はされているが、対象者にどのような健康への意識や行動の変化をもたらすかについての研究はみられない。

そこで、本研究では、ツベルクリン反応検査によって看護学生の結核に対する知識および健康行動がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本研究前に、先行研究を参考に「健康行動」尺度を開発し、他学科の学生93名を対象に尺度の信頼性および妥当性について検証した。また、「結核の知識」の質問紙については、研究者間で、内容の妥当性を検証した。

本研究では、平成13年度本学の看護学科に入学した1期生75名を対象に、ツベルクリン反応検査実施前後に上記で検討した質問用紙を使用し、調査を行った。なお、事前に対象者に文書によるインフォームド・コンセントを行った。

分析は、SPSSを使用し、記述統計、ウィルコクソン検定、 χ^2 検定を行い、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。

3. 結果および考察

アンケートの回収率は検査前が99%、検査後が97%であった。対象者の背景は、平均年齢18.68 (± 2.76)歳で、今回のツベルクリン検査結果では、陰性は1名のみであった。

1) 結核に対する知識について

検査前と比較して検査後で正解者数が有意に増加したのは、「痰に結核菌がでている人は、法律によって入院隔離される」の項目のみであった ($p = 0.005$)。一方、有意差はみられなかったが、検査前と比べて検査後で正解者数が増加する傾向にあった項目は、「結核患者接触後に手洗い・うがいが大切である」、「抵抗力が低下したときに発病する」、「保健所に届ける義務がある」であった。これは、調査期間中の学習内容との相乗効果によるものと考えられる。

2) 健康行動について

検査前と比較して検査後では、「健康に対する意識」がわずかに向上しているものの有意差はみられなかった。一方、「食生活」については、前と比較して後では有意に不健康な「食生活」となった ($p = 0.000$)。この結果についての解釈は困難であるが、調査時期が影響している可能性があり、今後さらに検討を重ねていきたい。

今回の検査結果を通して、手洗いの励行、食生活の見直しおよび適度な運動の実施などの健康行動を変容する者もみられたことより、ツベルクリン反応が対象者の健康に対する意識づけとして意義があったと考える。しかし、その割合が少なかったことから、ツベルクリン反応検査が、一層多くの対象者の健康への意識づけや健康行動変容につながるように、検査実施時に健康教育を導入するなどの検討が今後の課題と考える。